［COMMUNION］
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office

コミュニオン

東京教区時報［秋号］

第１９号
（通巻１２５４号）
2014 年 10 月２６日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18

日本聖公会 東京教区 青年会発足！

こんにちは！東京教区青年会です。
このたび、東京教区に青年会が発足いたしました！

東京教区青年会は、青年達にとって居場所であることを大切にします。

立ち上げの本年は、様々な状況下にある青年達が「繋がること」を特に大切に活動していきます。

青年のみなさま、とりあえず、集まりましょう。

活動詳細

日　時	毎月第４日曜日 17:00～21:00 （2014…10/26，11/23，12/28）
場　所	聖アンデレ主教座聖堂 （東京都港区芝公園3-6-18）
参加費	300円～500円
対象年齢	18(高校卒業年次)～35歳

◎聖アンデレ教会の夕の礼拝と共にはじめます。
◎可能であれば、事前に参加のご連絡を下さい。
◎途中参加、途中退席OKです。

青年会キックオフ BBQ！
2014/10/26(日) 17:00～

チャプレン　司祭 ロイス 上田亜樹子

東京教区の青年を取り巻く現状

東京は人がたくさん集まる場所ですが、就職や進学を機に家族との距離が開くことにより、教会の交わりからも遠ざかってしまう青年が多くいます。都内で生まれ育った青年たちにとっても、教会を訪れたとしても、同世代と出会う可能性が極端に限られている現状があります。

活動内容

東京教区青年会は、東京教区の活動の一環として、青年 世代同士の横の繋がりを活性化するため、定期的に集まり ます。様々な状況にある青年世代の受け皿となり、青年自身が積極的に繋がりをつくる活動を通して、精神的信仰 的な日常生活の糧となっていくことを目指します。また、 他教区、他教派の青年活動との連携を通じ、東京教区の青 年への情報提供も行います。

「学び」　「奉仕」　「交流」

この３つを軸とした活動の中で、そこに「人」がいて、 集い・礼拝する「場」となり、教区において青年世代の 宣教ベース、青年活動の主体となっていきます。 活動すべてを通して語られる神のみ言葉が、関わる人々 によって聴かれるだけではなく、東京教区全体の福音理解 と宣教活動に、新たな神の息を吹き込むことを信じ、教区 全体がこの活動に参与することを促します。

✉ seinenkai.tko@nskk.org
☎ 03-3431-2822（聖アンデレ主教座聖堂）

クリスチャンの課題を考える

サラーム・パレスチナでは昨年より月一回読書会を開き、村山盛忠著の「パレスチナ問題とキリスト教」を読んできました。6月7日、一粒の麦の会、正義と平和協議会、信仰と生活委員会の協力の下、同氏を迎えて講演会を催しました。又、ラブキン教授（カナダ・モントリオール大学、歴史学者　ユダヤ教徒）と、著作「イスラエルとは何か」について7月7日、懇談の時を持つことができました。

イエス・キリストのゆかりの地で起こっている問題は、私たちキリスト教徒に大きな責任があるのだとは知らなかった、ということを、二つの講演会・懇談会を通して気付かされました。

7月、イスラエル軍のガザ地区攻撃により、二千百人以上が殺され、十万人以上が住居を失ないました。停戦しても封鎖解除交渉は進まず、上下水道、食糧、医薬品全てが不足する中、来月には雨期の寒さが襲うでしょう。ガザの人々が普通の生活を取り戻す日まで、私たちは見守らずにはいられない。

［村山盛忠牧師の講演会］

村山牧師はご家族と共に1967年の第3次中東戦争をエジプトで経験されました。コプト福音教会の協力牧師として派遣されていた時のことです。そしてWCCのパレスチナ問題協議会（1975年、1983年）に参加された時、

当時のエルサレム教区リア司祭の発言が心に響いたと話されました。「わたしはアラブのパレスチナ人で昔からパレスチナに住んでいる。パレスチナの地では、ユダヤ人迫害は一度もおきていない。ユダヤ人問題を起こしたのはヨーロッパ社会である。ユダヤ人を迫害したヨーロッパ人が、ユダヤ人に償いをすべきだ。しかし償いをしているのは、パレスチナ人なのだ。あなたがたは聖地旅行をするが、パレスチナのキリスト者となぜ対話をしないのか」というものでした。

私たちの知っているキリスト教は、西洋キリスト教を通してであり、その西洋キリスト教会が異端としてきた「中東キリスト教会」の歴史と、旧約聖書の読み方を学びなおす必要を説かれました。

イスラエル国家が土地所有の根拠としているヘブライ語の「エレッ・イスラエル」（イスラエルの地の意）は、ユダヤ教が重視しているモーセ五書には出てこない。旧約聖書（民数記、申命記）における土地所有に関する解釈では、世界のすべての土地は本来神のものである。また聖なる地はパレスチナだけではない、どの地も聖なる土地であると話されました。

聖書にでてくるイスラエルと現在のイスラエル国家とは全く連続性はないと、ユダヤ教徒自ら世界に発信しておられるヤコブ・ラブキン氏の著書「トーラーの名において」を紹介されているところへ、たまたまこの時期に来日されていたラブキン氏ご本人が会場に入ってこられて拍手喝采。あまりにもタイミングの良い不思議な一日となりました。

H. M.

［ラブキン教授を囲んだ懇談会］

質問一：イスラエル政府は「いわゆる入植地の拡大政策」をどのようなプロセスの下に実行してきたのか、「誰を、いつ、どこに」といったシンプルな政策実行には、なにか一定のルールがあったのですか？

回答一：最初の段階では、政府の計画的なコントロールのもとに実行されたのではなく、短期滞在の許可をとって入り込み、そのまま居座わってしまう。あるいは国の許可なく占拠し、入植地を増やしていった。軍としては散在する入植者を守りにくいので、反対だったが、国は立ち入りを禁止することができなかった。入植者は事実を積み重ねて、水道などを引き、町を造っていった。こうした人々は全体の15％位でイデオロギー的理由から入植した人々です。後の85％は土地代も安く、税金など経済的負担の軽い入植地を選択した人々で、純粋に経済的理由からです。当時住宅関連の大臣であったシャロン氏が入植地に人を増やす政策をとり、旧ソ連など様々な国からやってきた人々もイスラエル国内よりも土地代の安い入植地を選んだわけです。

感想：理由は様々であろうが、要はイスラエル国内で経済的に困る人々にとって、入植地は住みやすい場所となっていったようです。政府といえども、選挙民である国民の行動をコントロールできなかったということかと思います。

イスラエル国家建設が名実ともに進むと共に、「甘い誘い」の手形を切っていた政府は、この手形を決裁する以外に妙手がなかったということかなあと考えます。

I. M.

質問二：ラブキンさんはシオニズムが伝統的なユダヤ教（ラビ・ユダヤ教）とは

断絶したところで成立したものであることを明らかにされました。シオニズムを是とする、ないしはシオニズムを宗教的に正当化している「民族ユダヤ教」は、古代からのラビたちの聖書解釈の集積を尊重せずに、聖書の「文字通り」の解釈を基礎にする別の新しい宗教なのであると。実際、イスラエル国建国以前、圧倒的大多数がシオニズムを拒絶していたこと、今も拒絶しているユダヤ教徒がいることを私たちはラブキンさんの著書によって知りました。

しかし、建国後、伝統的なユダヤ教を生きるラビ、信徒も、次第にシオニズムを受容して来たのではないでしょうか？

回答二：確かにそういう現象も見られるが、まず第一に、超正統派の人々への兵役義務免除の撤廃に対して起こった50万人もの人々による大規模な抗議行動が示したものを見て欲しいということ（イスラエルのユダヤ系人口は6百万人）。彼らは単に兵役を拒絶しているということではなくて、シオニズムへの加担を拒絶しているのであり、現在もこれだけの人々が信仰者としてシオニズムを否定しているという事実が示された出来事だった。

他方でイスラエル政府は、伝統的なユダヤ教の信仰者を取り込むことも画策して来て、一定の影響を与えている。伝統的なユダヤ教の信仰者は経済的に貧しい社会階層に多いので、彼らに安い入植地の住まいを提供して入植者にすることでシオニズムのシンパに変える政策を取り、一定の成果を上げている。

M．M．

質問三：私は今までイスラエル国内に住むユダヤ人は、すべてシオニストだと漠然と思っていました。しかしお話しをうかがっていると、問題はイスラエル国外のユダヤ人やその支持者、そしてとりわけシオニストクリスチャンと呼ばれる人たちの影響力が大きいということが見えてくるようですが、如何でしょうか？

回答三：イスラエルに住む非アラブ系イスラエル人は大体シオニストです。ここでユダヤといわずに非アラブといったのは、ロシア人など色々な帰還者が多数派に属して、国家を形成しているからです。

シオニズムの問題はイスラエル国内では重要な現実の課題として議論することができるが、国外ではバーチャルで現実ではないため、極端な立場をとることができる。自分の子供が戦争にいくわけではないので、無責任な立場で発言する。（アメリカの）クリスチャンシオニストは非常に裕福で、イスラエルの最も過激なシオニストに資金援助をしているので、その意味では影響が大きいと言える。ユダヤ人のシオニストは様々な政治的な立場の人々に援助している。

感想：シオニズムを支えている大きな要因は「イスラエルはユダヤ人への神の約束の地である」と聖書を解釈し続けるキリスト教信仰であり、信仰者の中には確信犯的なシオニストもいるが、漠然とそう信じている善良ではあるけれど、無自覚なキリスト者が圧倒的多数を占めると思われる。「無邪気な」聖地巡礼者も無意識のうちに、結果的にイスラエル政府を支持する側に立つことになってしまっているのではないか。

J．M．

質問四：パレスチナ問題は、私には遠い問題でしたが、今は違います。シオニズムが掲げる一民族、一宗教、一国家という体制を武力で押し進め、そのためなら同じ人間を殺しても義とすることは、過去に日本も行なってきたし、今後も起こりうる過ちだと思うからです。（キリスト教徒がシオニズムを支援してきた歴史的事実にも責任を感じます。）そこで、この問題解決のために、日本の一般人にもできることがあれば教えてください。

回答四：まず日本のメディアがパレスチナ・イスラエル問題をどのように報道しているか注意を払ってください。例えば、ユダヤ教徒とシオニストを混同してないかなど注意深く読み、事実と異なる場合は、その誤りを報道機関に抗議しましょう。また活動の戦略として、「民族」「宗教」「国家」など抽象的問題を語るのを止め、具体的な「家族」レベルの問題に焦点をあてて語りはじめましょう。例えば、難民キャンプのごく普通の家族がなぜ苦難を強いられるのかなど、現実の家族の問題に注目していくと、人としての共感が生まれるからです。

感想：ラブキンさんが述べられた二つの事は、パレスチナ問題解決へ向けてのまっとうな国際世論を日本においても育んでいく上でとても有効な助言だと思いました。実行にあたっては、常にパレスチナ・イスラエルの状況に目を向け続ける必要があり、決して容易なことではないと感じます。でも現地に行かずともここ日本において、深刻に進行するパレスチナ問題の解決のために、私たちにもできることがあると知り勇気づけられました。

M．S．

司祭と語ろう（その12）

司祭　上田　亜樹子

今回は、米国聖公会ハワイ教区から出向され、現在、立教女学院のチャプレンをされている上田亜樹子司祭にお話しを伺った。尚、聞き手は広報の前島と渡辺が担当した。

―　まず、はじめに教会に行くようになったきっかけは何でしょう

上田　両親がクリスチャンだったので、横浜教区の川崎聖パウロ教会で幼児洗礼を受けました。

―　それで自然と教会に行くようになったのですね、反発などはなかったんですか

上田　オルガンを弾く人が少なく、同い年の淳子ちゃんという友だちと一緒に小学生の頃から、礼拝で奏楽をしていました。教会の帰りには祖父母が待っている家に寄る必要もあったので、とにかく日曜日は、「教会＋祖父母訪問」というルーティンでした。でも、教会の人と一緒にいるのはあまり得意ではなく、お喋りをしていて楽しいとは思いませんでした。牧師さんのお説教も聞いていましたが、大人たちがどんなふうに振る舞うのかもシッカリ見ていましたね。だから積極的に礼拝に参加していたのではなく、教会はオルガンを弾くだけ、後はせいぜい人間観察、それ以外の用事はないというような、心は教会から離れていた状態だったと思います。

―　お勤めはなさったのですか

上田　卒業後はまず公立小中の音楽の教諭を2～3年しました。しかし、一生を賭けて取り組みたい仕事かと問い、いろいろなチャレンジもしましたが、組織上の問題もあって辞めました。その後、当時渋谷にあった管区事務所に勤務しました。様々な雑務が中心でしたが、内外の会議やら、海外からのお客様やら、教会や教区を越えたグローバルな聖公会の姿を垣間みる良い機会だったかもしれません。この間に神学院での聴講も始めました。

―　どうして聴講しようと思われたのですか

上田　子供の時からのいろいろな疑問を人に聞くより自分で学ぶ方が早いと思ったからです。川崎聖パウロ教会では神学生が主日勤務をしていたこともあり、神学院は身近な存在でした。でもそのうちにコマ切れの聴講はまどろっこしく感じられ、管区事務所を辞めて1982年に入学しました。

―　入学の際は、正式に横浜教区から推薦されたのですか

上田　教区の聖職候補生ということではなく、牧師の推薦をいただき、自費で勉強しました。

―　その時は司祭になろうとは思っていなかったのですね

上田　ぜんぜんです！

―　それからの歩みを教えてください

上田　神学院に入ってみると、いろんな人が、私が女性なので「牧師夫人になりたい人」だと思い込んでいることがわかりました。冗談ではなく、「誰の牧師夫人になるの？」「いいご身分ね」と真剣に言われた時はびっくりしましたが、当時は牧師と婚約した女性が、夫の仕事を理解するため一時的に神学院で学ぶ、というような習慣があったようです。教会や未来の夫？のためにではなく、自分のために学んでいた私ですが、思いがけない2つの出会いによって転機が訪れました。2年生の時に受けた臨床牧会訓練の際、初めて訪問した患者さんから「なぜこんなこと(病床訪問)をしているの？」と聞かれ、とっさに答えた自分の言葉にまずびっくりだったのです。「牧師になる訓練をしています」この時から聖職者の道もあるかもしれないと考え始めました。もうひとつの出会いは上田憲明です。まさか私の生き方にマジで共鳴する男性がいるとは思えなかったので、にわかには信じられませんでしたが、この人は私のことを私よりも信頼していると驚愕し、人生はうまく立ち回るだけではなく、真っ当にぶつかってもよいのだと思うことができました。また神学院での仲間にも大変恵まれました。3年生の時「聖職者として生きる」「上田憲明と一緒に生きる」希望があることを教区主教に相談しました。その時に主教は、「行けるところまで道を歩いて行ってみなさい」と言って下さったのですが、結婚するまでの「行けるところまで」とは私は受け取らず、「聖職者として出来る限りの力を尽くして道を行ってみる」と励ましていただいたと勘違いし、卒業後すぐに市川聖マリア教会に伝道師として派遣されたので、張り切って働き始めました。しかし、お会いする度に、「どうですか？決めましたか？」と聞いてくださるので、「何を？」と思っていましたが、それは「結婚したら当然辞める」という前提を、私が承諾したと理解されていたことが、後になってわかってきました。最初のボタンの掛け違いは、やがてどんどん大きくなり、「常習的な嘘癖」「精神的破綻」等の私に関する文書も流れ、教区に留まるのがだんだん難しくなってきました。説明を求め事態を理解しようとされる教区教会内外の青少年や信徒聖職者もいましたが、組織の中でのねじれは深くなる一方で、熱意だけで突っ走っていた私は敗退し、奨められた「休職願」を書くに至り、それで事態は一旦鎮火しました。

　この間に、笹森司祭、山野司祭との出会いもあり、「女性が教会を考える会」がスタートしたのもこの頃です。その後3年間程は静かにしていましたが、心の準備もできたので「復職願」を教区に提出しました。それに対する応答は「聖職候補生の身分も取り消す」というものでしたが、これはある意味、想定内。「聖職者になる希望を自ら放棄したのではなく、教区の決定により余儀なくされた」ことさえ明確であればよいと判断、それを受けて夫を教区に残したまま、アメリカに渡り、ボストンの神学校に入学しました。

―　日本の他の教区に移ることは考えなかったのですか

上田　教区が決断したことに他教区は敬意を払います。教区同士が対立してまで、私を引き受けるとは思いませんでした。他教団への移籍も考えましたが、聖公会にこだわりがある自分にも気付き、海外に活路を見出した次第です。

ー　その頃アメリカでは女性司祭は認められていたのですか

上田　１９７４年にフィラデルフィア・イレブンと呼ばれる出来事があり、11人の女性執事が退職主教によって司祭に按手されました。その後アメリカ聖公会の法憲法規が改正され女性司祭が続々と誕生しましたが、最初の11人のうちの３名が教鞭をとっていた神学校を選んで入学しました。

ー　そこでの神学校生活の様子をお聞かせください

上田　私が入学した１９９０年には、女性司祭賛否議論はとっくに終息、そして次の神学的論争はセクシャルマイノリティでしたが、共通課題が多いと感じました。

　性差別だけではなく、様々な偏見や差別の構造を理解し突破口を見つけ出すことが、その神学校を選んだ理由ですが、すでに神学校を一つ卒業していた私は、カリキュラム通りではなく、自分に必要な分野を教授と相談しながら選択することができました。また、２年生の時にハワイ教区主教と出会い、休学してハワイの教会や施設でフィールドワークをした後、ハワイ教区に移籍。卒業後１９９４年から病院チャプレンや教育主事、あるいはエステブランドのハワイ店立ち上げ他、様々な仕事で生活を繋ぎ、やっと２００１年に執事按手、そして２００２年に司祭に按手されました。相変わらず、教会の仕事だけでは生活できませんでしたが、ここで骨を埋めるのかなと思っていたら、立教大学で呼んでいただき、２００３年に日本に来た次第です。

ー　牧師ではなくチャプレンとしてのお働きについてお尋ねします

上田　聞きたくもない聖書の話を聞かされ、出たくもない礼拝に無理やり強制出席、と思っているキリスト教に何の興味もない人々に福音を伝えるのが、日本の学校チャプレンの仕事だと思います。聖公会関係学校を「聖公会信徒を優遇する学校」と勘違いされている方もいますが、信徒は優遇される側に落ち着くのではなく、未信徒に対する聖公会の宣教最前線で、共に働くチームの一員となっていただきたいと切に願っています。

　社会での支配的な価値観に埋没するのではなく、別の世界も持っている人は、いかに自由で解放されていて、しかも豊かな人生を過ごしているか、生き方をもって世に示していただけたらと思います。

　また、学校は児童、生徒や学生だけではなく、一緒に説教を聞いている教職員や保護者にも福音が届けられればと思います。

ー　今度、新しく発足する東京教区青年会のチャプレンになられましたが、何か抱負とかありますか

上田　教会の中で頑張っている人、離れている人、でも目に見えない大いなる存在を感じながらどうしようかなと思っている人、そんな青年達を全部含めて、キリスト教とか聖公会という言語を使い、思いを分かち合えたらいいなと思っています。

ー　たいへん期待しています。どうも今日は有り難うございました

◇◇◇

点字プリンター購入へ
「障がい者」関連活動連絡会

海宝　晋一

7月26日、障がい者関連活動連絡会主催、信仰と生活委員会後援の「点字プリンター購入のためのチャリティーコンサートⅢ」を聖アンデレ教会で開催。猛暑にも関わらず2百人以上の方が来場され、教会の全面的なご協力も頂き、楽しく成功裏に終えました。

プログラムは第1回から、川島昭恵さんの語りと、竹下ユキさんのシャンソン（上里知己さんピアノ）の二本立て。スタッフとの息もピッタリ。川島さんは宮沢賢治の「虔十公園林」他で、今回も小さな者が宿す大きな賜物・掛替えのない働きを語りました。竹下さんも歌唱力とトークで魅了、懐かしむように「最後だとわかっていたなら」、エンディングの「黒い鷲」も圧巻でした。チケット売上に加え多くの募金、3回のイベントで目標額を上回る収益となりました。

点訳した文章や画像をパソコンから印刷出来る点字プリンターは便利な機械ですが高価で、教区には当会保有の1台のみ。それも老朽化し、2年前に新規購入を決め、イベントに取り組んできました。何年かかるか、不安なスタートでしたが、聖霊のみ力を戴き、輪は広がり、今、感謝のうちに購入機種の選定を進めています。

日頃、宣教等のために多くの文書を作成・配布しますが、それを読めない人を忘れがちです。点字への関心を高め、点訳ネットワーク作りをも目指したこの企画は次の段階へと移行します。これまでのご支援に感謝いたします。これからの活動も共に支えてください。

合同こどもキャンプ2014
～あそぼう、みつけよう、清里の森で～

こども41名、スタッフ13名が集まり、7月29日～31日の3日間、清里のフォレスターズ・キャンプ場で東京教区の合同こどもキャンプが行われました。

プログラムは木の枝を切った名札作りに始まり、高橋顕司祭の宇宙の話、各班でチームワークを競うゲーム、川俣渓谷へのハイキング、こども達が作るスタンツや「妖怪体操」で盛り上がったキャンプ・ファイヤーなど、どれもみんな楽しそうでした。特にこども達のスタンツは「浦島太郎」などの昔話を題材にそれぞれの班が工夫を凝らし、生き生きと演じていました。たとえば「桃太郎」では、桃太郎の前にリンゴ太郎が出てきて簡単に鬼に負けてしまうといった具合です。そして、最終日はスタッフ全員、ほぼアドリブで子ども達のために「大きなカブ」のスタンツを行いました。

こども達が自然の中で思いっきり遊び、楽しい思い出を1つでも多く持って帰れるように、また来年もキャンプが出来たらいいなと思っています。最後になりましたが、支援してくださった方々、特にBSAの方々に感謝いたします。

（日曜学校スタッフ連絡会）

2014教区聖餐式
「神様に新たにされる」自分を求める祈り

さわやかな秋空が広がった9月23日（月・祝日）、大畑喜道主教の司式で東京教区2014教区聖餐式が行われ、会場の立教女学院聖マリア礼拝堂には450名の礼拝出席者の祈りの声が響きました。

上田亜樹子司祭（立教女学院チャプレン）の説教は、今年のテーマ「聖霊よ、われらを新たに」にどんな言葉を続けるのか、という問いかけから始まりました。

小さいころからその時々の教会生活に疑問も不信も持ちながらも、聖職となった自らの幼少期からの思いを振り返り、クリスチャンとしてどう神様と向き合い、信仰生活を歩むべきか、また東京教区に復活した青年会への期待を語られました。

使徒書が示すのは、礼拝で「新たな自分に変えてくださる」ように祈り、等身大の自分を見、出来る限りの努力をした後は、神様にすべてを委ねる決断こそが信徒の姿なのだと。

信施約40万円は「いっしょに歩こう！　パートⅡ／だいじに・東北」と「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」、「エルサレム教区アル・アハリ病院」に、また、献米19kgと献金が浅草聖ヨハネ教会日曜給食活動、聖公会野宿者支援活動・渋谷に奉げられました。

（広報委員会）

私たちの教会［１４］

ようこそ聖三一教会へ

当教会には、片道1時間以上もかけて通う信徒が多い。進学・就職・結婚などで三一教会から離れた所に住むことになっても教籍を変えずに通い続けているのであろう。家の近くに別の教会はあるはずなのに。しかし三一教会に通い続ける理由が、ここの信徒になって約6年経った最近よくわかる。私自身は海外も含め何か所もの教会を転々としてきたのだが、三一教会の信徒の間には『家族』の空気が流れている。居心地が良いのだ。

また多くの教会が同じ状況かと思うが、私の親世代（70代以上）の活躍が著しい。今年の敬老の集いは盛会、それに老という字を使うのがためらわれる顔ぶれだった。集いの日には対象者の手作り品などの展示コーナーも設けられたが、皆さんの趣味の多彩さと高い技術を目の当たりにした。日々信仰のもとに過ごしていることの現れなのだろう。10月のチャリティーバザーでも、例年通りこの世代の方々が大活躍なさることは明白である。

そして日曜学校『ぶどうの木』の活動も充実している。教会の庭に建つ洋館『トリニティハウス』を活用した一泊キャンプを7月に開催。2歳から小学校6年生までの子ども15人が参加した。保護者も含めるとそのハウスでは定員オーバーで、なんと聖堂もアレンジして数人が宿泊した。私は今年、日曜学校スタッフの一人に任命して頂いた。自分の子も含め、多くの子どもが楽しみにしている毎週の活動や行事に深く関われることに感謝している。次の世代が神様を身近に感じて、教会を家と思ってもらえるような活動が出来るよう、神様に導いて頂きたいと思う。

他にも映画会や、ファミリーコンサート、奇数月には手作りケーキの会など、信徒でない方々にも楽しんで頂けるイベントを数多く開催している。活気あふれる東京聖三一教会は、いつもあなたをウェルカム！

（ヴェロニカ　久慈　優理）

《信徒リレーエッセイ》

神様と私

渋谷聖公会聖ミカエル教会　青木　美菜

私が大切にしようとしている事は「今、ここ」という感覚です。忙しい毎日にあって、また時には、礼拝を捧げている時であっても「今、ここ」という感覚は、意識しないと失いやすいと感じます。このように意識するようになってから、どんなに忙しく仕事をしている最中でも、わたしと、わたしと一緒に居て下さる神様を思い起こし、教会の外にいる日常と、教会にいる時間の区別が段々となくなってきたように思います。しかしそれも、まず礼拝に出席することからはじまりました。跪いた時の膝と床が触れている感覚、御聖体を与る時の司祭の手の感覚、自分の呼吸。それらひとつひとつを丁寧に神様から受け取る事が、イエス・キリストを身にまとう事に繋がるのではないかと信じ、大切にしたいと思います。

管区総会の決議を受けて

ーヘイトクライム（人種・民族憎悪犯罪）、ヘイトスピーチ（人種差別・排外表現）の根絶と真の多民族・多文化共生社会の創造を求める日本聖公会の立場ー

東京教区総会代議員　司祭　笹森田鶴

２０１４年５月27日～29日に行われた日本聖公会第六十一（定期）総会において、表題の議案が多数により可決されました。この決議は、日本聖公会が１９８０年代からこれまでの歴史の中で起こしてきた様々な出来事や事件への反省と悔い改めの積み重ねの上に目指してきた、多文化共生への歩みを再確認するものでもありました。また、現在様々な場所で行われているヘイトクライム、ヘイトスピーチという憎悪の行動は、日本聖公会の宣教の方向性とは真っ向から対立するという表明でもありました。

この決議の二カ月後の７月６日、早稲田にある日本キリスト教会館とキリスト教視聴覚センター（ＡＶＡＣＯ）を標的とするデモが行われました。日本聖公会が加盟している日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）や日本キリスト教団出版局などが入っている建物です。そこに「朝鮮カルト組織犯罪撲滅デモ行進ＩＮ高田馬場～早稲田」というタイトルの80名程のデモ隊が来て、ヘイトクライム、ヘイトスピーチをキリスト教会に向けたのです。このデモ隊は二つの建物に対し、「反日の牙城」、「朝鮮カルト」と、全くの事実誤認の内容や人種差別語などを拡声器で叫び続けました。一方、このデモに対抗するために集まったキリスト者や早稲田大学の学生方の中の一人が不当に逮捕されるという事態も起こりました。

ここ十年の間に日本社会の中では、「保守」の名のもとに「在日特権を赦さない市民の会」（略称在特会）などの民族排外主義団体の活動がインターネットなどによって拡大・活発化し、各地で暴力的な言動を公安条例適応の名の下に起こし続けています。それによって地域住民の中でも社会的弱者の人びとに謂れのない差別と不安、抑圧を強いています。

ヘイトクライムやヘイトスピーチの対象となっているのは、日本の社会の中で脆弱な立場に置かれている少数者です。攻撃対象は在日韓国朝鮮人から在日アジア人、被差別部落の人びと、沖縄の人びと、被爆者、アイヌ民族、性的少数者と広がっています。これらの人びとに対する明らかな人種差別・少数者憎悪の言動を、表現の自由という枠で捉えることは決してできません。また見過ごしにすることはこれらの排外主義を認め、助長させてしまうことにつながります。

キリスト者は、すべての命が神より与えられていること、人が神の形に似せて造られた光栄を知っています。神が造られた命の尊厳が、人種・性別・民族・文化・宗教的理由において一方的に傷つけられることに否を投じ、真の多民族・多文化共生社会の創造と、神の正しさがもたらす真理を求めていきたいと願います。

ー編集後記ー

今回、巻頭ページは笹森司祭の原稿を掲載する予定でしたが、笹森司祭から青年会発足の記事は大切なので1面にした方がいいのではという助言をいただき、このような紙面構成となりました。

広報委員会では、よりよい紙面作りのために、皆様のご意見、ご感想などをお待ちしております。ぜひ教区の広報宛てにお寄せください。

◇　◇　◇

次回　クリスマス号
12月21日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（十五）

1．牧師のリーダーシップ

信徒１「君の教会の牧師は、牧師として教会を引っ張ってくれているかい」

信徒２「もちろん、よく引っ張ってくれていますよ」

信徒１「それはよかった」

信徒２「それがそうでもないんだ」

信徒１「どうして」

信徒２「だって引っ張っているのは足の方なんだ」

2．ボアネルゲ

牧師「イエス様の弟子のヨハネは、怒りっぽかったのか“ボアネルゲ（雷の子）”というあだ名をつけられました」

信徒「それじゃあ、うちの夫も家ではボアネルゲですね」

牧師「そんなに怒りっぽいんですか」

信徒「いや、いつも家でゴロゴロしているんです」

3．病者訪問

ある牧師が入院中の信徒を訪問して

牧師「いかがですか、もし気分がよければ聖書でも読んでみてください」そう言って聖書を手渡すと、

信徒「先生、これで天国へ行くための勉強をしろということですか」